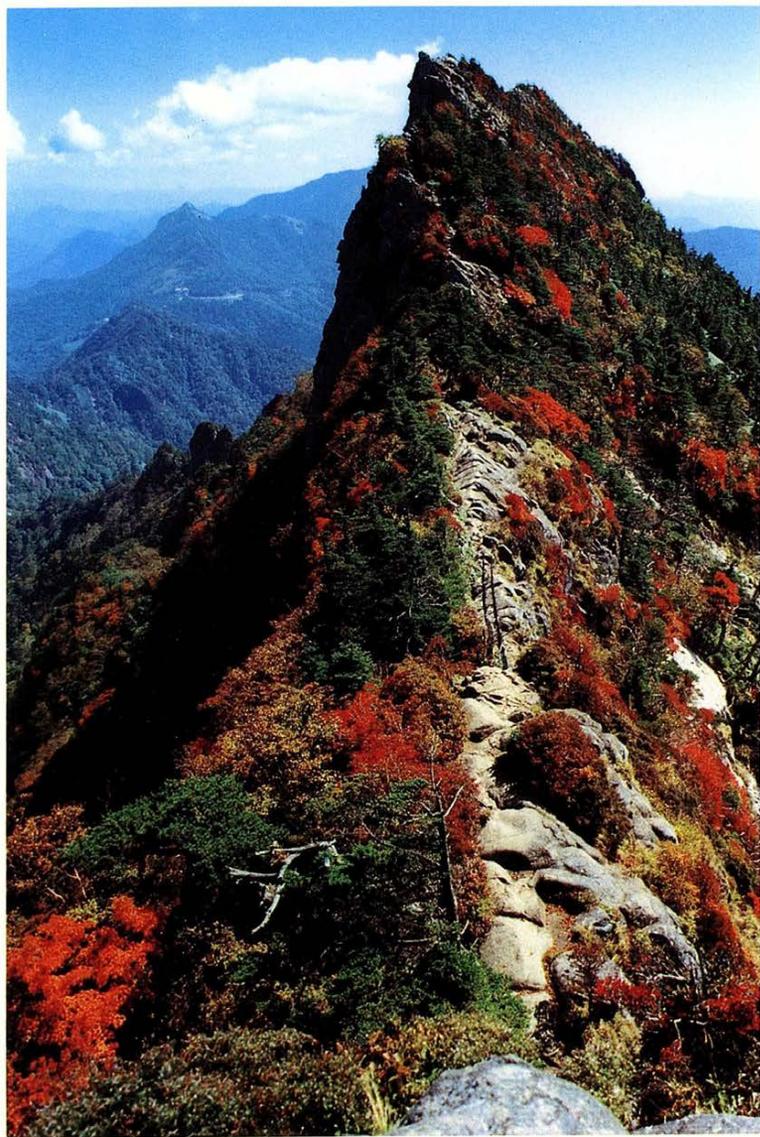


面河村志



面河村誌





靈峰 石鎚山



村長 中川 鬼子太郎



教育長 高岡 幸盛



収入役 中川 英明



助役 脇本 武雄



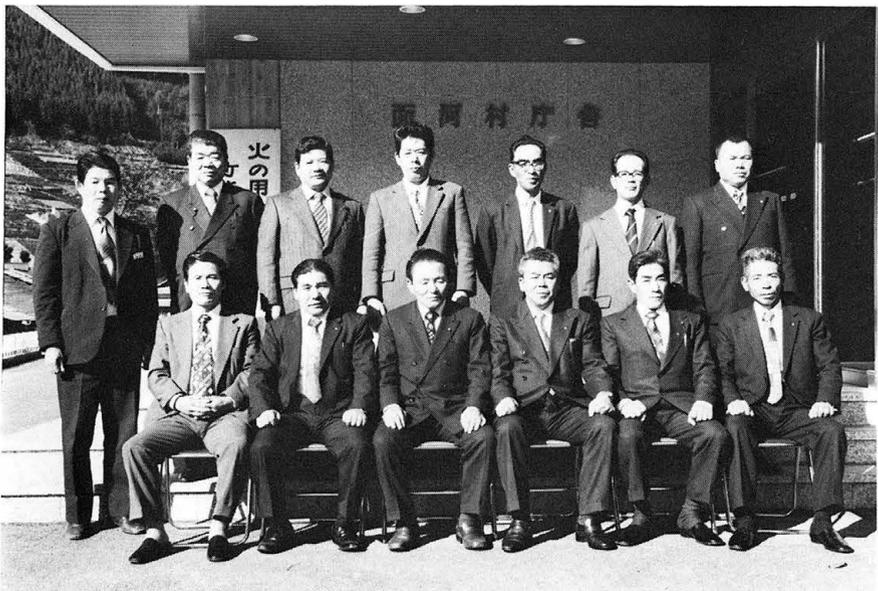
役場職員



副議長 山本 春美



議長 菅 福定



村議会議員



従七位重見丈太郎翁事績

翁は明治十七年一月四日温泉郡重信町大字牛瀨に生まれ本村に來住酒造及び林業を以て家業とされた。軍籍は陸軍中尉資性温雅識見高邁頗る公共心に富み選ばれて村議會議員六期助役一期村長四期教育委員長一期をつとめ殖産興業文化の向上村民福祉の増進に多大の功績を積まれる一方久万凶兇予備組合長一期組合議員七期をつとめ久万山民積の運営に努力しまた大面河觀光協會会長として觀光資源の開発と紹介に尽瘁された。こうして翁の村政に参与されること五十余年昭和三十八年六月八日七十九才で逝去されるまで其の生涯を本村発展のために捧げられた。時恰も翁が村長として調印し着手された笠方ダムが其の工を了え滴々たる水を溢えつゝ、ある現在村民感謝の総意をこめて翁の像を鑄り其の温容と高德とを永遠に仰がんとするものである。

昭和三十九年二月吉日

面河村村長 青木末広 謹識

重見丈太郎の胸像と碑文

従六位勲六等菅 広綱翁事績

翁は明治二十四年三月一日面河村大字柚野 菅福太郎氏の二男として生まれ幼少より向学心に燃え本村立小学校卒業後川瀬村立尋常高等小学校を経て上浮穴郡立臨時教員養成所を優秀な成績で卒業大正三年弱冠二十三才で本村収入役に抜擢され続いて同八年助役 同九年二十九才の若さで村長に就任された。爾來三期十二年間村有財源の蓄積を計ると共に産業振興に寄与せられた。面河溪の開発宣伝と村道県道の整備に力を注がれた。大正十一年より村議會議員六期を勤め更に昭和六年より二十八年間の長きに亘り郵便局長を勤められた。昭和二十二年以来県議會議員として活躍せられたが体調を損じ文教委員長を最後に惜しまれながら職を辞した。昭和四十四年三月一日七十八才で永眠されるまで生涯の殆どを面河村発展の為に捧げられた。その御功績が認められ従六位勲六等の追叙に浴した。我々村民は翁の業績を偲び村庁舎竣工を記念し茲に胸像を建立しその道徳を永遠に称えるものである。

昭和五十二年十月二十七日

第三十二代面河村村長 中川鬼子太郎謹識

菅広綱の胸像と碑文

歴代村長



3代 大泉 知重



2代 村上 英市



初代 土居 勝四郎



7,9代 中川 嘉蔵



6代 菅 福次



5代 石黒 信元



4代 菅 正志



14代 菅 広綱



12,13代 渡部 基綱



10代 小椋 和太郎



8代 菅 藤三



20,24代 小椋 凰一



17,18代 八幡 文太郎



16代 高岡 宮吉



15,19,25,27代 重見 丈太郎



29代 青木 定市



28代 青木 末広



26代 高岡 義信



21,22,23代 高岡 直雪

歴代村議会議長



4代 高岡 政保



2/7代 宮本 岸嗣



1/3代 小椋 胤一



9代 高田 信孝



6代 中川 行次



5/8代 青木 定市



12代 木下 勲



11代 中川 正直



10代 中川 鬼子太郎



議 会 風 景

面河村誌発刊にあたって

家には家系があるようにそれぞれの地域にはそれぞれの歴史と伝統があります。お互いの先祖を知り地域のルーツを知るとは地域づくりや人づくりの上でも極めて重要なことといわなければなりません。

私たちの面河村には、源平の昔からの平家の落人部落とか、木地師の郷の物語とかいろいろの伝承がたくさんあります。しかし、生活様式の近代化に伴い言い伝えの伝承もとだえがちになり、なお、村内における史実的な資料も乏しくこのままにしておけば、私たちは一生涯かな地域の歴史も知らず、また、乏しい資料も散逸してしまうおそれが多分に出てまいりました。

昭和四九年には村名改称四十周年記念式典が盛大に挙行されましたが、これをきっかけに住民の間では村誌編纂の気運が急激に高まってまいりました。

昭和五十年二月には、三六名からなる面河村誌編纂のための委員会が発足し、郷土誌の権威伊藤義一先生を編集顧問として御指導を仰ぐことになりました。しかし当初計画したように資料の収集が思うように進まず、ために昭和五十二年十一月から中川武久氏を専門委員として委嘱し編纂業務を推進することに努めたのであります。編纂の大綱はこれを二三の部門に分け①自然②歴史③人口④交通・通信⑤自治⑥産業⑦観光⑧特殊開発⑨教育⑩広報活動⑪民族・文化⑫生活⑬将来の展望として構成し編集活動を開始いたしました。人件費等は数次にわたり補正に補正を重ね編集に努力をしたのでありますが、いづれも見込が大きく違い、この上さらに補正することは住民感情よりしても好ましくないという声が議会内部より起こり、我々理事者としてもこのような意見を尊重する方針を決定したのであり

ます。ただ、その時点で未着手の⑤自治⑥産業⑦観光⑧教育の四部門については、村内学識経験者である小中学校校長先生がたが責任者となつて、昭和五十四年度を最終目標に是が非でも完結するということで決定されました。

長い歴史と伝統を持つ我が郷土、特に戦後急激に変わりつつある我が故里のあらゆる現象をあらゆる角度から解明していくことはたいへん難しく困難を極めたのであります。しかし編集を受け持っていたいただいた各委員や諸先生がたの積極的御努力が実を結びここに本誌の完結をみたのであります。本誌の刊行を契機として私たちは面河村の過去と現在さらに将来に思いを致し、正しく面河村を認識するとともに先人の残された偉大な業績をしのび継承して今後一層発展していくよう努めたいと思つてあります。終わりに臨み本誌の刊行に当たつて編纂の労をおとりいただきました編集委員のかたがた並びに資料の提供に積極的な御協力をいただきました村内外有志の皆様がたに対し深甚なる感謝と敬意を表わしますとともに、出版に当たりましては最新の技術を駆使してりっぱな製本をしていただきました株式会社ぎょうせいに對しこれまた深甚なる感謝と敬意を表明致しまして発刊の御挨拶と致します。

昭和五十五年二月

面河村長 中川 鬼子太郎

発刊にあたって

石鐘の聖流郷我が面河村は、天下に誇る山溪の観光地として開発されました。この広大な自然と住民の織りなす地道な文化の遺産。一〇〇年に余る歴史の中で多くの先人たちが、英知と協働によって作り出した血と汗の結晶。私はその御労苦に対して深甚なる感謝と敬意を捧げるものであります。

世の変遷は必ずしも陽の当たる時ばかりではなく、未曾有の過疎に見舞われてはいるものの、この豊かな自然資源を生かした産業の開発は、今後ますますその重要度を増し、新しい面河村への脱皮が期待されております。この新しい脱皮は、先人の偉大な業績とその志を継承し発展させるべき私たちの任務であり、住民に課せられた責務でもありませんよう。

明治は遠くなりましたが芳紀正に一九八〇年、この記念すべき年に長年の願望であった村誌が発刊されましたことはまことに御同慶にたえません。

村の過去を知るといふことは祖先の辛苦をしのび、生活の智恵とその心を学び、郷土のよさを知ることでありましたよう。

また、現在を見つめるといふことは「温故知新」の心、すなわち過去における業績の価値を認識して創造の道を見つめることでありましょう。

そして、さらに未来を展望するといふことは、見つけたその道をみんなでたくましく歩いていくその足でありますよう。

発刊にあたって

ここに発刊されました村誌はまたとない生きた資料でありまして、生きがいを高めることや、村の発展のための指標にしていただきたいものであります。

村誌の編集を企画してくださったかたがたや、編集のために本務のかたわら日夜を分かたず資料を収集し、まとめていただいた多くのかたがた、また、校正や完成のために目に見えない御心労をわずらわした関係者各位に対し心よりお礼を申し上げますとともに、この村誌が、明日からの村民各位の心の糧となり、絆となって、水と緑と空気と人が一体となった住みよいふるさとになることを祈念して村誌発刊の言葉といたします。

昭和五十五年二月

面河村議会議長 菅 福 定

編集顧問として

面河の地は石鎚山系の南斜面に位置し原生林に覆われて長年月を経たらしく、いつのころか若宮某と呼ぶ柚人が開拓の斧を入れたという口碑がある。

土佐勢の侵入に備えた東明神の大除城が天正十三年に落城して大野家将士が村内の草原・若山・大成・昼野・波草・土泥・笠方等に住みついていて開発の指導者となったとか、あるいは木地師が入山して椀・盆の類を製作したという記録もある。

江戸時代に表向きは北番村という村高九百八石の大村であったが、実は三百七十余年昔の慶長十二年に柚野村・大味川村が成立し、それが明治二十二年の町村制で柚野村をつくり、昭和九年に面河村となった。村名は名勝面河溪から得たが、おもこの名は天明年間に松山藩士加藤勘介が面子山御用で登山したと円光寺の明月が記録に留めている。

面河村は久しく文化から隔絶されて心温まる民話を育てた山里であるが、近年は石鎚・面河溪・ダムと登山に観光に都会人士を集める新旧共存の村であり人口流出の悩みを抱えた過疎の村でもある。いま村の現実を正確に記録に留めることは今後の発展に資するのみでなく、今日の典型的な一山村の姿を見るものとして日本的な意義がある。

私が中川村長から編集顧問を委嘱されて村を訪ねたのは昭和五十年三月であったが、その後役場の機構も変わり、執筆の先生がたの転任があつて計画が頓座し、文筆に優れた中川武久氏が単独でつづられた数年間もあつた。こうしたピンチを切り抜けて、教育長高岡幸盛氏が初志貫徹を期し、現任諸先生の全面的な御協力を得て最終的にまとめられた。顧問とは申し条、私は公私多忙にかまけて十分な責務が果たせなかつたが、所期のとおり本誌がりっぱに完成

編集顧問として

したことは喜びに堪えないところで、ここに、関係各位の御努力に対して深甚の謝意を表すものである。

昭和五十五年二月

愛媛県史編纂委員 伊藤 義一

目次

口 絵

面河村誌発刊にあたって

発刊にあたって

編集顧問として

面河村長 中川 鬼子太郎

面河村村議会議長 菅 福 定

愛媛県史編纂委員 伊藤 義 一

第一編 自然

第一章 位置・面積・地形……………三

第二章 気象……………七

第三章 地質……………一七

第四章 植物……………二七

第五章 動物……………四二

第二編 歴史

第一章 古代・中世……………五九

第二章 藩政時代……………七八

目次

目次

| | | |
|-----------|-------------|-----|
| 第三章 | 明治・大正期 | 一〇一 |
| 第四章 | 昭和期 | 一四〇 |
| 第三編 人口 | | |
| 第一章 | 大正期以前の人々 | 一七五 |
| 第二章 | 太平洋戦争後の人口動態 | 一八二 |
| 第三章 | 海外移住の人々 | 一九〇 |
| 第四編 交通・通信 | | |
| 第一章 | 駄馬の時代 | 二〇五 |
| 第二章 | 土木政策 | 二一四 |
| 第三章 | 県道の開通 | 二二二 |
| 第四章 | 自動車交通時代 | 二二九 |
| 第五章 | 郵便通信業務 | 二三五 |
| 第五編 自治 | | |
| 第一章 | 村政 | 二四九 |
| 第二章 | 財政 | 二六一 |
| 第三章 | 村議会 | 二六八 |

目次

| | | |
|----------|---------------|-----|
| 第四章 | 治安と消防 | 二七一 |
| 第五章 | 保健衛生 | 二七七 |
| 第六章 | 社会福祉 | 二八七 |
| 第六編 産 業 | | |
| 第一章 | 農林業基盤 | 三〇一 |
| 第二章 | 土地利用 | 三一〇 |
| 第三章 | 作目の歴史 | 三一九 |
| 第四章 | 造林と木材加工 | 三七二 |
| 第五章 | 養魚・養鳥 | 三七八 |
| 第七編 観 光 | | |
| 第一章 | 面河溪及び石鎚スカイライン | 三八三 |
| 第二章 | 面河ダム及び鼓ヶ滝など | 四〇五 |
| 第三章 | 土産品 | 四〇八 |
| 第四章 | 村営観光施設 | 四一〇 |
| 第八編 特殊開発 | | |
| 第一章 | 面河ダム | 四一五 |

目 次

| | | |
|------|-----------|-----|
| 第二章 | 石鎚スカイライン | 四二二 |
| 第九編 | 教 育 | |
| 第一章 | 学校教育 | 四二九 |
| 第二章 | 社会教育 | 四九七 |
| 第三章 | 教育委員会制度 | 五三六 |
| 第一〇編 | 広報活動 | |
| 第一章 | 小走(こばしり) | 五四七 |
| 第二章 | 村営私設電話 | 五四八 |
| 第三章 | 広報放送施設 | 五五〇 |
| 第四章 | 面河村の広報紙 | 五五四 |
| 第一一編 | 民俗・文化 | |
| 第一章 | 村落の構造 | 五五七 |
| 第二章 | 衣食住の移り変わり | 五六三 |
| 第三章 | 労 働 | 五八五 |
| 第四章 | 風 習 | 五九七 |
| 第五章 | 芸 能 | 六一一 |

| | | | |
|---|----------------|-----------|-----|
| | 第六章 | 伝説 | 六三四 |
| | 第七章 | 文芸 | 六四五 |
| | 第八章 | 神社と常夜燈 | 六五三 |
| | 第九章 | 寺と堂 | 六六二 |
| | 第一二編 | 生活 | |
| | 第一章 | 昔の生活 | 六七三 |
| | 第二章 | 今の生活 | 六八七 |
| | 第三章 | ふるさと祭り | 七三〇 |
| | 第一三編 | 将来の展望 | 七三三 |
| | | ―就任中の思い出― | 七三五 |
| | 資料編 | | |
| | 一人名録 | | 七四三 |
| | 二 郷土歴史年表 | | 七五六 |
| 次 | あとがき | | |
| 目 | 面河村誌の編集に携わった人々 | | 七七三 |

愛媛県 上浮穴郡 面河村全図

